

## 「違う」の形容詞活用とその機能の分布について —「違う」はなぜ違くなったのか?—\*

長田 詳平  
(筑波大学 文芸言語専攻)

若松 弘子  
(筑波大学 文芸言語専攻)

### 1. はじめに

本来、五段活用動詞である「違う」が「違くて」「違かった」のように、形容詞の活用に沿った形で用いられているという事実は、言語学分野(井上 1985, 1998; 北本 1995)のみならず、それ以外の文脈でも指摘されている<sup>1</sup>。本稿ではこの形容詞型の活用をする「違う」を考察の対象とする。規範的には、動詞「違う」は五段活用動詞であり、(1a) もしくは(1b) の活用をするが、同時に(1c) のような活用は、特に、会話や twitter などのいわゆる「打ちことば」において頻繁に耳にする表現である。

- (1) a. 昔はバレーボールのルールが違った。  
b. 昔はバレーボールのルールが違っていた。  
c. 昔はバレーボールのルールは違かった。<sup>2</sup>

(井上, 1998: 68)

この形容詞型活用をする「違う」については、起源は北関東付近の方言とされ、1980年代以降、使用が広がったと推測されている(井上, 1988)<sup>3</sup>。さらに、北本(1995)では井上(1985)の調査を基に大学生にアンケート調査を行った。「違かった」以外にも「違くて」や「違ければ」

\* 本稿の作成にあたって、筑波大学の西牧和也氏より非常に有益なコメントを頂いた。ここに感謝の意を表す。ただし、本稿のあらゆる誤りや不備は全て著者らに属する。

<sup>1</sup> [https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question\\_detail/q1241024402](https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1241024402) (2018/1/16 取得)

<sup>2</sup> 井上(1998)や石井(2011)は、「違った」と「違かった」の使用に関して、母語話者は前者を完了、後者を過去として機能の分担をしていると指摘しており、それによれば(1)のような例文は「違かった」の方が適切であるという。井上ではそのような判断に基づき(1a)に対し??という容認度を与えている。ただし、著者らの内省では、この文脈での「違った」、「違かった」の容認度は先行研究ほど明確な差があるわけではない。したがって、本稿では両者の意味の使い分けという観点では深く立ち入らない。

<sup>3</sup> 井上(1985)が、墨田区の中学生を対象にして、「違かった」の使用を最初に観察した。その当時は、対象者の約30%がこの形態の使用を許容したという。つまり、東京近辺ではいわゆる「若者言葉」として使用され始めたということである。

が産出された結果より、井上からちょうど10年という期間を経て「違う」の形容詞形は連用形と未然形を備えたと述べている。また、同時期の井上(1998)の調査では、90年代の段階で全ての活用がそろったと指摘している<sup>4</sup>。さらに約10年後の石井(2011)は90年代に比べて、各形容詞の形態の許容度は上昇していることを指摘している。上述のように当該言語事実としての周知の度合いは高いのだが、それに比べ先行研究の数は決して多くはない。上で概観した調査に基づくと、主に、①90年代に既に形容詞活用形は全て揃っている、②北本(1995)から石井(2011)までのおよそ15年間で「違う」の形容詞型活用は市民権を得たといえることができる。なお、具体的な数値はこれら先行研究に委ねる(cf. 本田 et al. 2016)。ここで、当該語彙の動詞活用と形容詞活用を提示する。

表1 「違う」の動詞及び形容詞活用 (cf. 石井 2011)

	語幹	未然	連用	終止	連体	仮定	命令
動詞	違	わ	っ	う	う	え	(え)
形容詞	違	かろ	かつく	え	え	けれ	
cf.	近	かろ	かつく	い	い	けれ	

次に「なぜ?」という問いを考えてみたい。つまり、なぜ動詞「違う」が形容詞型活用を得ることになったのか?そして、なぜこの時期に形容詞化したのか?ということである。前者の問いに対して、北本や石井は、興味深い指摘をしている。「違う」の形容詞型活用は、「違う」が持つ意味(静的(形容詞的)な状態性)と形態(動詞)のギャップを埋めるために生じたものであると考えら

<sup>4</sup> 形容詞の終止形及び連体形の活用から予測すると、当該形容詞はそれぞれ「違い(.)」(cf. 近い。))、「違い(道)」(cf. 近い道)が考えられるが、両者とも容認度は全くない。その事実を指摘しながらも、井上は「ちげえ」という形式が形容詞の終止形および連体形にあたるという。そして、「違い」という本来の形容詞の活用から予測される形態が存在しない理由を、すでに動詞「違う」の名詞形「違い」があることに求めている。

れる。そして、「違う」が持つ動的な意味は、より動作性の強く表れる動詞で表現するという流れになっているようである(石井 2011: 60)。概略すると、動詞「違う」の意味と形態とのギャップが引き金となり、形容詞の形態を付与されたということである。確かに、「違う」が元来形容詞的であるという指摘に関しては、筆者らも同意するところである。しかし、このギャップを引き金と考えるのであれば、他の静的な意味しか持たない動詞の形容詞化を予測してもいいはずである。例えば、動詞「合う」は「AがBにふさわしい、適切である」というように動作性はないが、今のところ形容詞型活用はない。また、仮にこのようなギャップを原因とするとしても、上の2つ目の「なぜ」である、時期の説明に関しては、また別の説明が必要である<sup>5</sup>。

以上の議論を踏まえ、最終的には「違う」の形容詞化に対する理論的な説明を与えることを目標としているが、そのような目標及び、今後の研究指針を踏まえ、本稿は、現在の日本語母語話者による当該語彙の実例を調査し、先行研究で言及されていない「違う」の用法の発見及び記述をすることを目的とする。

## 2. 理論的前提

まず、動詞・形容詞とは何か？ということを変更して定義してみよう。先行研究は形容詞の活用形を目印として議論してきた。特に、北本や石井の当該言語変化の説明は品詞の性質と活用形の対一関係を前提としている。しかしそのような立場に立つ限り、上で述べた「合う」のように品詞と意味とが乖離した語彙というのは決して珍しくないという事実に対し、説明を与えるのは難しいだろう。このような背景から、本稿では形式主義的な立場より、動詞と形容詞を定義してみることにする。Baker (2003a)は、この2つの語彙範疇に対し概略以下の定義

<sup>5</sup> 井上の分析にあるように、元々使用していた北関東の話者からの広まりというのも、おそらくその影響はどこかにはあるであろうが、それを直接的な要因とするならば、今回の事例は新たな語彙の定着というよりも、動詞から形容詞への範疇変化であるので、果たしてこんな短期間にそのような変化が起こるかということにも疑念が残る。

を与えている(cf. Baker (2003b)):

(2) a. 動詞は主語に意味役割を付与する。

b. 形容詞それ自体は意味役割に関与しない。<sup>6</sup>

更に、意味役割という点で動詞「違う」の性質を概観する。森田(1977)に基づくと、「違う」は①「AトBハ違う」、②「AハBト違う」、③「Aガ違う」という格パターンを持つことになる(森田 (1977), cf. 石井(2011: 62))。本稿において重要な点は、形態に関わらず「違う」が動詞であれば、主語以外の名詞句に意味役割を与え、形容詞であれば、主語以外には意味役割を与えないということである。これを踏まえ、以下に「違う」の二つの範疇における定義を述べる:

(3) a. 「違う」が使用文脈において「ト格」を想起させる場合、動詞である。

b. 「違う」が使用文脈において「ト格」を想起させない場合、形容詞である。<sup>7</sup>

また、この定義によって、動詞形と形容詞形で相互に交代可能な実例についても、新たな示唆を与える。先行研究では、言語事実として、形容詞形に対する母語話者の違和感が消失してきているとの指摘がある。しかしこれは必ずしも、動詞形の衰退を含意しない。例えば石井の調査2は形容詞形が生じるの文脈での動詞形の使用の可否についての調査はない。もし形式と意味とのギャップが形容詞化を推し進めているのであれば、動詞形に対しての違和感はむしろ生じるはずである。しかしながら、後述するがこれは事実と反する。一方、本稿での定義に従うのであれば、「ト格」が想起出来る限りは

<sup>6</sup> (2)に関しては、もう少し詳しい説明が必要である。主語への意味役割の付与は厳密にはVではなく、機能範疇Predが行う。換言すれば、(2a)は「動詞はPredを持つ」ということになる。さらに、Bakerに基づけば、日本語形容詞にもPredはあるということになり、当該言語の形容詞は主語に意味役割を与えるということである。

<sup>7</sup> ここで「想起」という表現を使ったのは、日本語の特性を考慮してのことである。日本語は主語や目的語などの項の省略を許すので、動詞だからと言って必ずしも明示的に「ト格」が表現されているわけではない。このことは、コーパス調査に際し、明示的な語の有無のみではなく、意味や解釈も含めた詳細なデータの吟味が必要であることを示唆している。なお、この「ト格」という言葉に関しては、「違う」における適切な意味役割が不明であることと、「ト」以外の助詞を取らないことから便宜上呼ぶことにする。

たとえ形態的に形容詞であってもやはり動詞なのであり、次節で見る、ほとんどの実例が交替可能であるという事実はこの定義に従えば、問題ではない<sup>8</sup>。次節では、この定義を用いて今回収集した実例の提示及び分析を行う。

### 3. 分析

実例の収集には、データ解析環境 R version 3.4.1 上で rtweet パッケージ(Kearney, 2017)を使用し、Twitter への投稿テキストにおける「違う」の活用の実態を調査した。リツイートを除く、「違」を含む 2018 年 1 月 6 日に投稿された 1000 件の投稿を観察し、分析を行った。

まず、形容詞型活用のほうが動詞型活用よりも圧倒的に出現頻度が高い。特に、動詞未然形「違わない」と連用形「違って」が 0 件だったことは興味深い。ちなみに、それぞれの形容詞活用は 100 件、220 件見られた。なお、形容詞型活用に関しては全て観察された。以下に一部のみ示す。

- (4) そりゃ優先順位も違かろう。 [未然形]  
 (5) なんか顔違くない? 笑 カウコンのやつ? それとも JUMP のコンのやつ? [連用形]  
 (6) うわあキャラ違え [終止形]  
 (7) お互いのキャラが違ければ違う程キャラチェンジとか絶対面白いでしょ…w [仮定形]  
 さらに活用形以外にも形容詞であることを示す形式が観察されている。  
 (8) 自分なりに男装と女装で違さ出せるようにと思ってるのでそう言って頂けてとても嬉しいです<sup>9</sup>

<sup>8</sup> よって、本稿における考察は音形具現と素性を分離して考えるという意味で分離仮説 (Separation Hypothesis) に依拠した分析である。

<sup>9</sup> 「違い」という名詞が既にあるのに「違さ」が用いられることは興味深い。著者らの直観では、本来「形容詞語幹+さ」は中立的述定と評価的述定の二つの用法があるが(新屋 2006)、「違い」が前者、「違さ」が後者を分担しているようである。この考察は以下のツイッターからの実例で、「違さ」の方が自然であることから証左される。

- (文脈: 友達との賑やかな飲み会写真を見せながら)  
 i. A: …でも自分がダメになる 死にたくなる位今の自分嫌い どんどん自分がダメな奴になる  
 B:: 文章と写真の違さ ww

[語幹+さ]

- (9) →どんどん欲が出てくる→自分たちの舌がラーメンに慣れていく→求めている味と違なってくる→

[形容詞連用形+なる]

- (10) 画が違過ぎるwww [形容詞語幹+すぎる]

- (11) (画像を掲載して) オケでの写メ!

顔ちが違 (爆<sup>10</sup>) [イ落ち]

上の事実は、一見すると「違う」は形容詞に取って代わられたように見える。しかし、(12)のように同一発話者の中で「違う」の動詞形と形容詞形の共存は観察される。つまり、発話者の文法から動詞型活用は排除されていないといえる。

- (12) アイシャドウとかつける幅が左右で結構違う。MAC の人にやってもらったアイシャドウも左右で幅が違くて、、わかるんだな〜って…語彙

以上を踏まえて、暫定的な考察を行う。観察事実として、①形容詞形の使用が拡大しているが動詞形の容認度が下がっているわけではないこと、②上の形容詞の実例は形容詞用法の構文(8-11)を除く全てで動詞形での交替が可能であるということが挙げられる。これらの事実が示すことは、形式上の違いは必ずしも意味上の区別に貢献しておらず、動詞形であるか、形容詞的であるかを問わず、話者の文法知識の中では「違う」は静的な意味を持つといえる。本稿での定義に当てはめると、このことは「違う」の形容詞活用型の多くは依然として動詞であるということになる。しかし、興味深いことに、形容詞の型から動詞への交替を許さない実例もある。次節ではこれについて記述する。

### 4. 交替不可能な「違う」

(13a)の投稿者は風が強いことを嘆くツイートを発信した後の自身のフォロワーからの「台風?」という返信を受け、(13a)を発信している。つまり、(13a)は「台風の季節

<sup>10</sup> この実例は、1月6日に収集したものではないが、当該日においても次のようなイ落ち構文は観察された。

- ii. イケメンですよ! オーラが違!

しかし、この実例は「ガ格」が生じているという点で、典型的なイ落ちと異なるため、当該注のみで言及することとする。

ではないよね？」という意味である。(13a)の「違くない」を動詞連用形に変形したものが(13b)であるが、(13a)と(13b)は意味的に同等とは言い難い。同様な交替不可能性は(14)にもみられる。

(13) a. 台風の季節違くない? w

b. ?? 台風の季節違っていない? w

(14) a. 普通に LINE してきておいて? 病んでた? っか謝ってくるとこ違くない? まぢクソだわ。イラつく。

b. ?? 普通に LINE してきておいて? 病んでた? っか謝ってくるとこ違っていない? まぢクソだわ。イラつく。

(13)を(5)と対比させてみると、注目すべき点は、見た目上、「形容詞連用形+ない」である「違くない」には、動詞への交替可能性という点で、明確に区別されるということである。このことは、(3)の定義より説明可能である。つまり、どんなに静的な意味であっても、動詞である限りは「ト格」が存在し、一方、形容詞であれば「主語は変だ」といった単なる主語に関する叙述になるということである。このことは、(14b)に、「謝ってくるとこ常識と違っていない?」のように「ト格」を補うと容認度が(14a)と相違ないことから支持される。したがって本稿は、形容詞型の活用を示す「違う」の中に、形態統語的性質上依然として動詞のものと、動詞からすでに脱範疇化している形容詞の2種類があると結論付ける。

## 5. おわりに

本稿は、形容詞型活用の「違う」には、「形だけ」形容詞の姿をしているが性質上動詞のままのものと「ト格」を想起しない完全な形容詞の二つが存在している、ということを主張する。この主張は、上で述べた今後の研究課題を洗練させることになる。つまり、「「違う」の形容詞型活用の出現と形態統語的な「形容詞化」は相互にどのような関わりがあるのか?」というものである。この点に関しては試案に留めるが、可能性の一つを紹介する。動詞の形態をしていながら、動詞らしさが無い「違う」の用法として、文否定としての「(いや、)違う(。)」がある、興

味深いことにこのような「違う」は否定極性項目である「全然」との共起を許す。「違う」が否定辞である、もしくはこの「違う」が既に形容詞であるといった明言はここでは避けるが、少なくとも、動詞型の活用であっても動詞として分析するのが困難な用法が存在していることは事実である。もっと言えば、このような用法からの「純粋な」形容詞化の発達の可能性は十分考えられるであろう。しかし、この可能性の立証にはコーパスデータの詳細な吟味に加え、当時の母語話者の文法知識も考慮する必要があり、今後の課題としたい。

## 参考文献

- Baker, M. C. (2003a) *Lexical Categories: Verbs, Nouns, and Adjectives*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Baker, M. C. (2003b) “‘Verbal Adjectives’ as Adjectives without Phi-features,” ed. by Y. Otsu, *Proceedings of the 4th Tokyo Conference on Psycholinguistics*, Hituzi Syobo, Tokyo. 1–22.
- 石井由希子 (2011) 「五段活用動詞「違う」の形容詞型活用」『千葉大学日本文化論叢』12: 55-76.
- 井上史雄 (1985) 『新しい日本語—《新方言》の分布と進化』明治書院.
- 井上史雄 (1998) 『日本語ウォッチング』岩波新書.
- 北本洋子 (1995) 「日本語動詞「違う」の形容詞型活用の実態」『横浜女子短期大学研究紀要』10: 135-14.
- 新屋映子 (2006) 「形容詞派生の名詞「～さ」を述語とする文の性質」『日本語の研究』10: 33-45.
- 本田謙介・田中江扶・畠山雄二 (2017) 「動詞「違う」の形容詞型活用」畠山雄二(編)『最新理論言語学用語辞典』, 朝倉書店, 370-371.
- 森田良行 (1977) 『基礎日本語-意味と使い方』角川書店.
- R Development Core Team (2017) R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. URL <https://www.R-project.org/>.
- Kearney, M. W. (2017). rtweet: Collecting Twitter Data. R package version 0.6.0 Retrieved from <https://cran.r-project.org/package=rtweet>